

Monto Kaj Nêgo  
Monata Organo de Monta kaj Nêga Clubo.

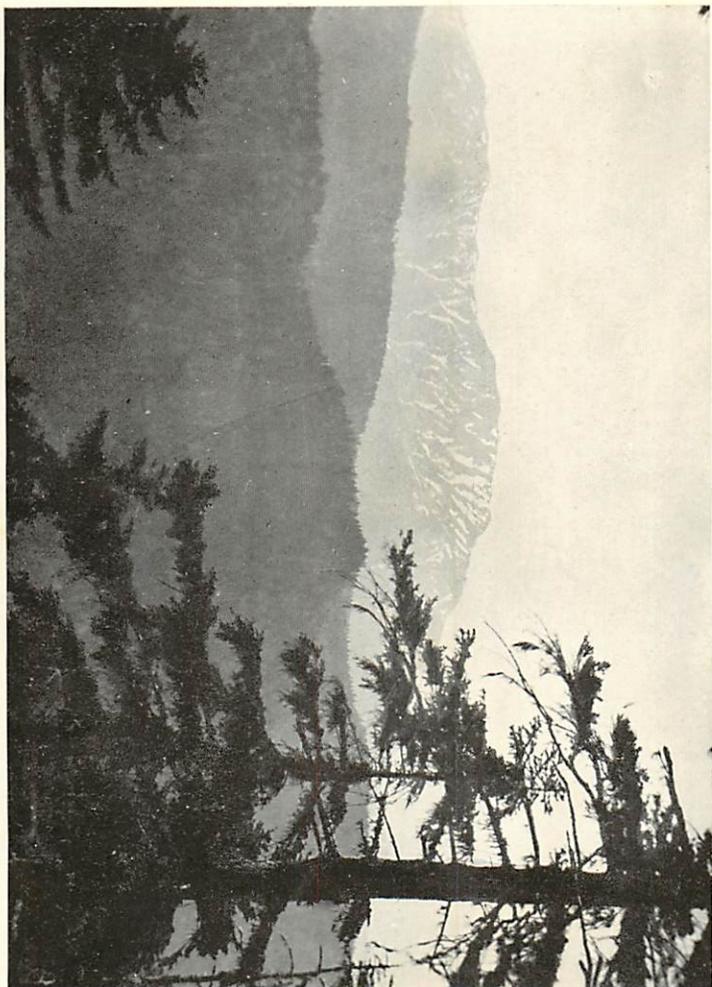
# 山と雪

第 貳 號



札幌 山と雪の會 發行





北見富士（イカリヤマナシ山）の中腹より見たる武利岳

古屋胤雄

# 瑞西山岳會の登山小屋

譯者の前置

グスターフ・クルツク 著  
山崎 春 雄 譯

茲に譯述するクルツク氏の著書は本來は瑞西山岳會ウト支部の登山小屋 (Die Klubbhütten der Sektion Uto S. A. C.) と題し一九二二年同支部の出版に係るものであります。ゼクチオン・ウトは瑞西山岳會の支部の内、チューリヒ市を中心として組織せらるゝ最も有力なるものゝ一で、ウトはチューリヒ市郊外の丘陵の頂ユトリベルグ Uetliberg の別名であります。S. A. C. の支部の内にはモンテ、ローザ又はベルニナ等の如く堂々たる四千米級の山名を附して居るものもあればウト又はバハテル等の如く僅に千米内外の山頂の名を平氣で名乗つて居るものもあります。

ゼクチオン・ウトから以前出版された『登山者のラートグーベル』は日本でも早くから多くの人々に讀まれて居ますが極く特殊の問題である登山小屋の建築と云ふ様な書物はあまり類が無いのみならず、今日のように登山小屋の建設が盛になつて來た時代に此のクルツク氏の勞作の如きは是非ひろく之を同好の諸君に紹介し度いと思つて其の譯述を思立つた次第であります。翻譯並びに多數の設計圖を複寫して『山と雪』に發表することに就いてはクルツク氏は日本の登山の爲になる

と云ふならば衷心から喜んで之を承知すると云ふ快諾を與へて呉れました。譯者の手許にある原書も昨年クルツク氏が私等の山小屋建設の参考の爲にチューリヒから贈られたものです。著書の重なる興味は多數の詳細なる設計圖にあると思ひますが百分一縮圖の細い線や文字が複寫で原版通りに出るかどうかいさゝか心配です。

クルツク氏は現在チューリヒ市の建築局長をつとめて居る人です。永い間ウト支部の小屋監督 Hiltensmann の任に當り多數の登山小屋を計畫し自ら工事を指導して居ます。かくの如き經驗家の著述に於てこそ、我々は最近の模範的登山小屋建築に就いて一々の構造圖や仕様書に依る具體的の説明のみならず汎く各方面に亘る一般的考察、貴重なる經驗に基づく設計上の方針及び小屋管理の諸問題に對して最も信頼すべき教示を受けることが出来るでせう。

クルツク氏は最初 S・A・C 中央委員會の委囑を受けて會の小屋全部に就て記述する積りであつたが、之は今日到底不能の事業なので差當りウト支部關係のものゝみに限局したと其序言に斷つて居ます。ウト支部の小屋は瑞西アルペンの内でも其の流行登山中心から遠ざかつた山地に建てられたものが多く、従つて是等の中心地方の小屋の如く我々の耳に親しく響く様な名を持つて居ませんが、其の建築上の質から云へば代表的のものが多く其管理の方法に於ては正しく模範的のものとして云はれてゐます。チューリヒ大學の有名なる老地質學教授の名を冠した其のアルベルトハイムヒュツテの如き、設計も近代クラブヒュツテの最高標準のものですが、就中其の建設の歴史を讀む人はヒュツテ其物が直に瑞西山岳會の健全なる理想主義の具體的表現であつて、其所に我々の模範とすべき精神的の啓示を受けねばならぬことを感ずると思ひます。

尙 S・A・C の小屋に關する出版物としては、最近一九二八年中央委員會の出版として、新しい小屋の寫眞帖 *Hüttenalbum* が發行されました。これは一九二七年現在の百二のクラブヒュツテ *Klubhütte* と五の宿泊所 *Übernacht* とを全部集録し所屬、定員、到達路、重なる登頂及び峠越え、文獻の簡單なる本文とジークフリードカルテの切抜に到達路を記入したものを小屋毎に添えてあります。撮影はすべて氷雪又は岩峰の勝れた背景を撰んだ美事なものばかりでアルペンの寫眞帖としても立派なものです。

尙最後に記述の中に多く繰返されるS・A・Cの組織上の機關の名稱を簡單に説明しておきます。

支部。ゼクチオン。S・A・Cを構成する最も大切な地方別の單位であります。多くの意味で地方の獨立の山岳會とも考へられます。丁度多くの獨立のカントンの聯合で瑞西共和國が出来てゐる様なものです。登山小屋は各支部の所有ですが例外としてマッターホルンのソルヴェー避難小屋とベタンヒュツテが直接中央委員會に屬して居ます。

中央委員會(Centralcomitee) S・A・Cの最高機關で七人の定員と三箇年の任期が規定されて居ます。中央委員長は後に述べる代表會の選舉によつて選ばれ、選ばれた委員長の屬する支部は其の會員中より残りの中央委員を選出するのです。

代表會 (Abgeordnetenversammlung) 各ゼクチオンの代表より組織せらるゝ重要な機關で代表の數は支部會員の數に比例し、會員數五十人以下の支部は代表一名、百人以下の支部は二名、更に會員百人毎に代表一名の割合に規定せられて居ます。毎年一回開催されます。

總會、Generalversammlung これは會員全体の集會で三年に一回開催されることになつて居ます。

#### A. 總論

一、S・A・Cに於ける登山小屋建築の發達

二、S・A・C登山小屋に關する諸規定

三、小屋の設計及び構造

#### B. 登山小屋解説

一、スパンオルトヒユツテ

二、ドームヒユツテ

三、フォルアルプヒユツテ

四、フェライナヒユツテ

五、メデルセルヒユツテ

- 六、カドリモヒユツテ
- 七、アルベルトハイムヒユツテ
- 八、クレインテンヒユツテ
- 九、一九二一年小屋計畫
- 一〇、スキーヒユツテ計畫
- C. 登山小屋の管理
- D. 考慮と經驗
- E. 登山小屋の收支計算
  - 一、毎年支出勘定
  - 二、小屋の經費
  - 三、建設費及び管理費用
  - 四、財源

## A 總論

## 論

瑞西山岳會は其の創立の眞の最初より登山小屋の建設が其の最も重要な任務の一なることを認識したのである。既に一八六二年十月二十日ベルン大學地質學講師にしてチューリヒ名門の出なるシムラー博士 Dr. Rudolph Theodor Simmler が瑞西國民より成る所の山岳會を創立せんが爲に瑞西登山家及び山岳愛好者に向つて配布したる檄文中にも此の點に就て指摘して居る。又瑞西アルペンの開拓に不朽の貢獻をなせる先達者ゴットリーブ、スツーターデル Gottlieb Studer も亦此の機會に於て次の如く述べて居る。『かくの如き山岳團體が其の財力を以て出来る限りの高所に宿泊所を設置すべしとの意見はこれ眞に予が衷心より云はんと欲した所のものである。思へば予のアルペン高峰への登頂に其の雄大なる印象と環望の研究とに専心没頭せんが爲に又筆を把て其形象を紙上に寫さんが爲に若干の時を山頂に過し度しと熱望したること果し

て幾回ぞや。しかも予は安全なる宿泊地點への長き歸路の故に其都度一刻の猶豫も許されずして此の愉樂を斷念せざるを得なかつたのである。』

Der Gedanke, die materiellen Mittel der Gesellschaft namentlich auch zur Erstellung von Lagerstätten auf möglichst hohen Standpunkten zu ver wenden, ist mir aus der Seele gesprochen; denn wie oft hatte ich mir gewünscht, wann ich einen der hohen Alpengipfel bestiegen hatte, stundenlang auf demselben zu verweilen, um mich so ganz den gewaltigen Eindrücken und dem Studium des Panorammas hinzugeben und mit dem Stifte die Formen aufzuzeichnen——während ich auf diesen Genuss verzichten musste, weil der lange Rückweg bis zu einem erriglichen Nachtlager keinen Verzug erlaubte. (Gottl. Studer, 19. Dec. 1862)

一八六三年四月十九日オルテン Otten に於ける三十五人のアルペン愛好者の參集により瑞西山岳會は創立せられ會員は即日S・A・C第一の登山小屋をグラールスの名山 Tödi の爲に建設することを議決したのである。

## 一、S・A・Cに於ける登山小屋建築の發達

アルペン初期登山の開拓者は懸崖の下を辛うじて間に合ふ程度に手入れしたる露營場を以て満足した。彼の有名なるオテル、デ、ニウシャトロア Hôtel des Neuchâtelois も此の種類の宿泊場に屬するものである。ニウシャテルの博物學者アガシー L. Agassiz デゾール Desor 其他の人々がウンテルアール氷河中央堆石の大岩塊の下に設けたる露營場なるが故にかく呼ばれたのである。此の仲間の一人なる Dollfus は一八四五年露營場の附近なる氷河左岸の岩壁の上に瑞西アルペン最初の登山小屋を建設した。此の小屋は簡單なる石造二階建にて普通アルプ小屋と同じ作りであつた。ホテル、デ、ニウシャテロアの「本館」と區別する爲に「別館」の意味でバヴィオン Pavillon と戯れに呼ばれた當時の命名が今日まで此の小屋の公の名稱となつて居る。小屋は一八七二年にS・A・Cに寄附せられた。今日現存のバヴィオン、ドルフースは一八九四年ツォフィンゲン支部の新設に係るものである。

S・A・C自身の登山小屋建設事業はまづ Todt のグリューンホルンヒュツテ Grünhornhütte 2541m の建設により開始された。(註 S・A・C初期の會則によれば會は順次に或る山岳地方を指定して之を其の Exkursionsgebiet と定めて之を登山的に開發することとなり Todt が其の第一の目標に撰ばれたのである。) ヒュツテは一八六三年即ちS・A・C創立の年に既に落成した。建築費八百七十六フラン。此の最初のグリューンホルンヒュツテは岩稜を背とせる柁葺の小さな小屋である。其後七年を経て一八七〇年改造せられ更に一八七三年及び七四年に亘り擴張された。(收容人員八人)

S・A・C第二の建築はトリフトヒュツテ Trifflhütte である。最初のトリフトヒュツテは老ヨハン・フォン・ワイセンフルーがS・A・C創立の翌年即ち一八六五年に登高の事業に對する感激より自己所有の木造小屋を息子等と協力してウインデックよりテルチストック Thallstock の下、トリフト氷河の縁まで擔ぎ移したものである。

此の小屋に代り一八六七年に至り稍大なる石積柁葺屋根の小屋が建設された。これ現在舊トリフトヒュツテとして殘存せるものであつて此の一八六七年の建設に係る古き小屋は當時自然の猛威に對する避難場より外に高山に於て何等他に欲するものを持たなかつた所のS・A・Cの創立者が如何に登山小屋なるものを心に描いて居つたかを最も明白に物語る好標本である。一九〇六年ゼクチオン、ベルンは會員クーリツヂ W. A. B. Cooldige 及びハスレル G. Hartur の寄附金に依り以前よりも稍高所(二五一七米)に木造の立派な新トリフトヒュツテを建設した。

第三のS・A・C登山小屋は一八六五年ゼクチオン、レーチア Sektion Rhätia の建設に係るシルヴェツタヒュツテ Silvretalhütte である。シルヴェツタ氷河の縁、海拔二四六五米。此小屋は石造であつたが堆石の移動の爲に破損し一八八九年遂に放棄され、ゼクチオン、ダヴォースの新シルヴェツタヒュツテが是に代つて建てられた。

尙同年此の小屋の外在來の山小屋を改造したるブラツタ、スーラヒュツテが設置された。Exkursionsgebiet の開發の後再び放棄され壞廢に歸した。

一八六七年。グレルニツシユヒユツテ Glühnschlütte 2515m. 石造柁葺。一八七六年改築。七七年擴張、現今の新ヒ

ユツテは少しく低所に一八八五年木造として建設さる。

一八六八年。上マッターホルンヒユツテ Obere Materhornhütte 3818m. 岩を背壁とせる石造。一八七九年結氷の爲放棄  
せる。

一八六九年。ベルグリヒユツテ Berglhütte 3284m. Grindelwalder Fischerfirm のベルグリと稱する岩稜の上に建築さ  
る。一八八三年(三二九九米)新築。一九〇四年現在の木造小屋となつた。

一八七〇年。Diablersの頂バ・デユ・リュストルの岩窟ヒユツテ、六年後結氷の爲放棄。

グレックスタインヒユツテ。二三四五米。ウエツターホルン登攀の小屋である。最初はワイスホルンヒユツテと稱しグ  
リンデルワルドの案内人の手によりて建設された。有名なる露營場グレックスタインの附近なる爲め其名を負ふに至つた  
のである。一八八〇年附近(二三三八米)に稍々コムフォルタブルな石造柂葺の小屋が新築された、現在のものは其附近  
に建てられたるホテルを買収し一九二〇年に改造したものである。

一八七一年七二年。舊ムーンテヒユツテ、Munnehütte 2880m. 石造柂葺。チナールロートホルンの西側。デユラン氷  
河の右岸、現在のものはコンスタンチアヒユツテと稱し一八八七年の建設に係る。

ツアツボルトヒユツテ。二三二〇米、石造、ラインワルドホルンの麓。ヒンテルラインの水源なるバラデイース氷河の  
縁。

一八七二年。最初のロートタールヒユツテ Rotalhütte 2755m. ラウテルブルンネン谿谷よりユングフラウ西側の困難な  
る登攀に使用さる。

一八七三年。舊ヒューファイアルプヒユツテ及びテイルウイースヒユツテ。

一八七四年。舊グツギヒユツテ Guggihütte 3379m. グツギ氷河右岸。石壁柂葺屋根。一八九四年新築。現在の小屋は  
一九一二年に舊小屋よりも四百米の高所に建てらる。ユングフラウ群北側の登攀に用ゐらる。

リシャンナヒユツテ。一八八七年放棄。

一八七五年。フラウエンバルムヒユツテ。一八九三年放棄。現今のブリュムリスアルプヒユツテ（二七八一米）に代る  
ストツキエヒユツテ。Stokjähütte 2750m. ストツク、チーフエン及びツムツットの三氷河の中間にある岩稜の上。一八八  
九年雪崩の爲め一掃さる。

一八七六年。アルヴィエーヒユツテ。

舊ワイスホルンヒユツテ。（二八五九米）十五年後放棄。オルニヒユツテ。

一八七七年。最初のコンコルデアヒユツテ Concordiahütte 2870m. 此の第一のヒユツテはゼクチオン・モンテローザと  
エツギスホルンのホテル、カトラインとの協力にて建設されたものである。一八九二年同じホテルの手にて近傍に別に宿  
泊所が設けられた、それ以來ヒユツテは中央委員會とホテルとの共同管理に屬することゝなつた。一九〇八年ゼクチオン・  
グリンデルワルドが小屋の持主となり同時に現今の新ヒユツテが建てられた。新ヒユツテは木造二階建、收容人員六十人  
である。

モルテルヒユツテ。

舊ボヴァールヒユツテ Bovahütte 2450m. モルテラツチユ氷河の左岸。ベルニナ群峰登攀の小屋。此の小屋建築以前に  
ボントレシナ案内人組合の建てたる石造バラックが既に存在して居つた。現在のボヴァールヒユツテは一九一三年の新築  
に係るものである。

シユワルツエツクヒユツテ Schwarzeehütte 2486m. 石造。收容人員十人。ストラレツクヒユツテの建設までは専ら  
シユレツクホルン附近登攀の出発點として用ひられた。

一八七八年。ウイールドホルンヒユツテ。

一八七九年。エーラヒユツテ。

最初のドツセンヒユツテ。

一八八〇年。ヘルンリヒユツテ Hornlütte 3298m. 或は一名下のマッターホルンヒユツテとも呼ばれた。ゼクチオン・モンテローザの建設に成る。定員十七人。一九一二年ツエルマツト村營に係る四十人收容の宿泊所が接近して建設された。現今のヒユツテは一九一五年の改築。收容人員二十人である。

スバンオルトヒユツテ。ゼクチオン・ウトの建設。

一八八一年。バノシエールヒユツテ。

一八八二年。シャメルラヒユツテ。後年放棄。

一八八三年。最初のオーベルアルヨツホヒユツテ Oberaujochlütte 3293m. 鞍部の西の岩壁の上。前年オーバーハスリの案内人が協力して建てたものである。木造。十五人收容。現今のものは一九〇四年の建設に係り構造同前、收容人員は約二倍となつた。

一八八四年。ルツクフーベルヒユツテ。

第二のドツセンヒユツテ。

一八八六年。ミーテンハウス。

一八八七年。フェライナヒユツテ。シルヴレッタ群南部の登攀に用ゐらる。一八九二年雪崩の爲根こそぎにされた。一八九五年再築。最初ウト、現在ブレーチガウ支部に屬す。

ムツトゼーヒユツテ。

以上はS・A・C創立以來滿二十五年間に建設せられたる合計四十六の登山小屋である。

尙其後一八八八年より一九〇〇年迄の間には三十五の小屋が新築又は再建され更に一九〇一年より一九一二年迄の間には四十九の建造が算えられる。デュビー Dübri の S・A・C創立五十年紀念出版（一九一二年）によれば五十年間の建造

百三十を計上し、其内廢棄されたもの十一、又其四十二は再建であると云ふ。

一九一二年に於ける小屋の現在數は八十四である。其他尙五の宿泊所 *Unterkunft* を經營し、各支部は別に多數のスキ  
ー小屋を所有又は賃借して居るのである。

中央會計より支部に對する建築の補助金支出額は大約次の如くである。(註、一フランは邦貨約四十錢に當る)

一八六三年—一八七〇年	三、九〇八フラン
一八七一年—一八八〇年	二一、七〇八フラン
一八八一年—一八九〇年	三二、〇〇三フラン
一八九一年—一九〇〇年	一〇二、〇八三フラン
一九〇一年—一九一二年	二五〇、六一一フラン
一八六三年—一九一二年合計	四一〇、三一三フラン

此の金額は中央會計の同期間總支出に對し其三〇・九%に相當して居る。

次に一九一三年より一九一二年迄の間に於て中央會計より小屋新改築、修繕、設備及び道路の爲めに補助金の支出高合計二一三、三三三フランに達して居る。同じ期間に個人、支部及び中央會計が小屋建設の爲に費したる金額の總計は約四八〇、〇〇〇フランである。其以前の時期に就ては記録が残つて居ないのであるが、同様なる比例を以て計算すれば一八六三年より一九一二年迄の間の總建設費は約九七〇、〇〇〇フランと概算して大差なしと信ぜらる。然らばS・A・C創立以來一九一二年迄の間に登山小屋の建設、修繕及び設備の爲めに支出したる金額は百四十五万フランと計算することが出来る。尙之に加ふるに各支部が小屋の爲めに年々支出する所の多額の管理費を合算するときは、實に驚くべき事業を遂行したものと云はざるを得ないのである。

## 二、S・A・C登山小屋に關する諸規定

登山小屋の設置、建築營繕費の支出、管理及び監視の問題はS・A・C及び其支部の諸機關の不斷の努力を要したのである。

一八七七年始めて小屋に關する最初の規定が實行さるゝことゝなつた。此の規定は九個條より成り、建設地點の撰擇、小屋の安全、大き、構造、設備、修繕、經營、使用及び監視に就て遵守すべき原則を確定したものである。新築、經營、監視の費用は支部が負擔し、設計圖及び建築費見積書に對しては必ず中央委員會の承認を必要とし、其の自由なる裁量によつて中央會計より支出すべき補助額が決定さる。小屋の修繕は全部中央會計の負擔となつて居る。

此の規定に於ける支部負擔の過重なることが次の規則改正の動機となり一八八六年二十個條より成る所の新規定が實施さるゝに至つた。此の新法は所有權、建設、管理、檢閲の四章に分たれて夫々明確なる規準を與へ尙最少限度の小屋備附品の表を定めた。

此の規則に依り新に小屋を建設する場合には支部は之を中央委員會に提案し、小屋の設計圖、見積書を同時に提出せねばならぬ。中央委員會は建設の必要を審査し補助額を定め支出することゝなつて居る。小屋に於ける燃料の備付と薪代は支部の決定に一任し、之に反して小屋の使用及び宿泊は如何なる場合と雖も常に無料たることが明記せられてある。又中央委員又は其委任者は毎年小屋の檢閲を行ふべきことが新に定められた。

一八九四年初めて小屋宿泊料 Hiltentaxe として會員半フラン會員以外の者一フランを納むることを實施する小改正を行つた。

一九〇七年には更に會則全部に亘る大改正に伴ひ小屋規定も改められて三十個條を含むものとなつた。新規定はまづ第一條に於て登山小屋の目的を定義するに『S・A・Cの登山小屋は山岳登攀の支持點たるべきものにして遊山の目的地又は山上の旅館料理店たるべからず』との明文を以てした。尙中央委員會は支部が特にスキーに適せる地方に於て既設の山小

屋を賃借し之に設備を施さんとする場合には補助金を支出することを得との新規定により次第に隆興の氣運に向へる冬期登山に對するS・A・Cの態度を示して居る。

現今實施せられつゝある小屋規定は更に一九一五年ベルンに於ける代表會の議決に依るものである。本規定の外、『小屋建設及び經營方針』『小屋番人服務規程』が同時に決定された。

第一條に於ては小屋の目的が前同様嚴格に定められて居る。

第二乃至第七條に於ては小屋の所有權に關する諸問題が規定されて居る。支部は其所有小屋敷地及び到達路の權利を獲得すべきこと。支部解散の場合には小屋に關する全部の權利は無償にて全山岳會の所有に歸することが重なる點である。

第八條乃至第十七條は建設と經營に關する事項である。新築又は大規模の改築に對する中央會計の補助額は支部の財政狀態を參酌すべく建築費及び設備費に對し其の三分二を超過することを得不い。代表會は中央會計の補助に對し附加條件として其小屋に於て飲食物の販賣 *Bewirtschaftung* を禁ずることが出来る。

第四章は第十八條乃至第二十五條を含み、小屋の使用及び監督、備品經理に關する諸規定である。山岳地方の支部は低地方支部の小屋監視を援助する義務がある。中央會計は小屋及び備品に對し火災保險に加入すること。毎年少くとも二回（春秋）小屋、備品及び周圍を根本的に掃除すること。中央委員會はすべての小屋使用者の遵奉すべき使用規約を作成して之を小屋内に掲示すること。S・A・C會員外の者、案内人及び人夫は會員の指揮に服従すべきこと。登山小屋は原則として戸締りをなさざること。救急豫備食料及び夏冬共充分なる薪を備置くこと。訪問者多數なる期節は小屋番を置きて監視すること。小屋の使用に對し使用料を徴收し其收入により小屋の經常費及び監視の費用に充つること。S・A・C會員、同權の他の山岳會員、案内人及び人夫は日中の滞在は無料、宿泊一人一夜半フラン、會員以外の者は日中半フラン、一泊二フラン。寢床の四分一は會員専用として保留し置くこと。団体宿泊者は少くとも十日以前に其所屬支部と交渉すること。小屋は中央委員會及び各支部の委任を受けたる管理者より定期の檢閲を受くること等が主なる點である。

然るに今日の情勢に於ては早くも此の一九一五年の規定も亦不十分なものとなつて來たのである。夏期に於ける登山者の洪水は年を逐ふて激甚となり、登山小屋が會員以外のあらゆる種類の山岳旅行者によつて占領せらるゝこと益々多くなるに從ひ之に對する新しき手段を講ずることは當面の急務となつた。一九二〇年十一月シュウイツに開かれたる代表會は小屋使用料の思切つた値上げに依つて制限を加へんことを期した。S・A・C會員、其妻子、同權利の他山岳會員、案内人及夫人一夜一フラン、之に反して會員外の者よりは晝間滞在者一フラン、宿泊一夜三フラン、晝夜滞在者四フランを徴收することゝなつた。然し一般に之を以て問題を解決し得るものでないとの意見が一致して居るのであつて代表會に於ても此問題に就ては活潑なる意見の發表が行はれた。相當注意をひいた議論として土曜日及日曜日の兩日に限り小屋を會員専用とし會員外の者に對しては使用を拒絶すべしとの意見が出たけれども、かくの如きは瑞西山岳會の理想に背馳するものとして當然反對されたのである。アールウに於て開催の中央委員會も斷然此の提議を否決し他の穩健且確實なる手段により健全なる状態に導くべきことを希望した。一九二一年十一月バーデンに開かれたる代表會には此點に就て充分根據ある議案が提出されたのであるが、代表會は之を支部小屋管理者より組織された調査委員會に附託し翌年秋の代表會迄に慎重審議することゝなした。從來の規定によれば午後十時迄は小屋定員四分一に相當する寢床を會員用として保留することゝなつて居るが之では確に未だ不充足である。新議案によれば小屋の一部を、出来るならば全く他の一般宿泊者と隔離し得る居間及び寢室として會員専用保留することを規定せんとするのである。又アールウの中央委員會は一九一五年制定の小屋規定第一條、即ちS・A・Cの登山小屋は山上の料理店たることを得ずとの大方針を徹底的に實行に導かんことを企てたのである。即ち登山小屋に於ける飲食物の提供を全廢すること即ちゼクチョン・ウト及び其他の支部に於ては早くより良好なる成績を以て實施せる事柄をS・A・C全体の小屋に及ぼさんとの計畫である。小屋番人には救急食糧の外、あらゆる種類の飲食物を調理販賣することが嚴禁されねばならぬ。小屋番人は單に必要に應じて登山者の自ら携帶し來れる食料を調理し其の勞力に對する一定の手數料を受く可きである。此の案にして若しも實行せらるゝならばこれ實に吾人の登山小

屋の健康化に向つての一大進歩を意味するものであらう。

多くの人々に取りて此の改革は困難な思切りを要するに相違ないが山岳會の登山小屋が山上の料理店なるを常例とする彼の奥國アルペンの如き不健全極まる状態に陥らんとする危険に吾人が直面せることを思ふならば何人と雖も其の必要を確信するであらう。

一九二二年現在のS・A・C所屬登山小屋八十四の中左の十七に於て未だ飲食物の販賣が行はれて居る。

フエライナヒユツテ	グレールニツシユヒユツテ	ケツシユヒユツテ	クラリーデンヒユツテ
ボヴァールヒユツテ	エツツリヒユツテ	チエルヴァヒユツテ	ヒユフイヒユツテ
ツエサブラナヒユツテ	ロールバハヒユツテ	シルヴレツタヒユツテ	ベタンヒユツテ
カランダヒユツテ	ムーンテヒユツテ	サルドナヒユツテ	ムットゼーヒユツテ
カムボテンチアヒユツテ			

尙此外若干の小屋に於ては小屋番が珈琲、牛乳、スープ等に限り販賣することを許可せるものもある。

小屋の設置場所、設計及び設備に關してS・A・Cの小屋規定は次の如き原則を示して居る。

一八八六年九月四日の規定には附近に他に宿泊所無き地點に限り小屋を設置すべしとの制限がある。其場所は雪崩及び落石の危険なく又乾燥地なることを要する。飲料水が附近に得らるゝことは望ましい。特に日當りよき位置を撰擇すること。岩壁と直接觸るゝことを避くること。小屋の收容人員は少くとも六人乃至八人の寢床を備ふる程度たること。構造は堅牢單純を旨とすること。小屋は扉及び窓を備へ、寢床、棚、炊事ストーブ及び必要な備品を置くこと等が其主なる點であつた。

尙中央委員會作成の最少限度の備品表が之に附せられてあつた。

一九〇七年の改正規則にて收容人員が十人に増加された。又新に便所及び塵芥捨場を設くべきことが追加された。

尙新に小屋の到達路を標識し導標を建設すべきことも附加された。備品表も前のものに比し著しく豊富となつて居る。

一九一五年の新規定に於て位置に關しては前年以來の注意を繰返して居る。收容人員の最少限度は寢床十五人分に増加された。新なる追加として中央委員會の承認を得て冬期間小屋内の一部を閉鎖することが出来る様になつた。附則として新に出來た『小屋建設及び設備方針』の内には登山小屋の新築及び經營は其の目的に違ひ出來る限り單純を旨とし山上旅館又は料理店の性質を帯びしむることを得ずとの注意がある。又既設小屋の擴張は寧ろ新築によるを利益とせざる場合に限り之を實行すべきこと、擴張の必要に迫れる場合には出來得る限り隔離せる寢室に専用の炊事設備を具備せしめ、完全なる獨立の運用をなし得る様に設計し各部十二人乃至二十人を收容し得ること。小屋の到達路は登山者の容易に認識し得る程度に止め、散步路又は車道として完成すべからずと云ふが如き注意が示されてある。

### 三、小屋の設計及び構造

S・A・C 存立六十年の間に其登山小屋の設計、構造及び設備は大なる變遷を遂げたのである。僅少なる登山者の數と、會の財力の乏しかりしことと兩々相俟つて、最初の登山小屋は今日の立場より見れば規模は小さく構造は原始的に設備も亦貧弱なるを免れなかつた。然し尙他に其原因として擧ぐべきことが一つあつたのである。當時は生活其のものが今日に比すれば實に單純であつた。當時山岳の美に對して眞の感激に打たれたる開拓者が高山に於て求むるものは山村の住民と同一の生活であり最大の單純を以て満足することであつた。

彼等は山上に於て自然の暴威より逃るゝ所の救難所より外には何物をも求めなかつた。かくてS・A・C 創立者及び最初の主腦者は彼等自ら打建てたる最初の登山小屋に對し充分誇りを感じるものが出來たのである。何故ならば其は開拓者の露營場に比較すればとにかく驚くべき進歩であつたから。

アルペンの開發が進むにつれて山岳愛好者の數が増加し、S・A・Cの發展と夢想だも許さなかつた登山の發達とは相俟

つて登山小屋に對する要求を次第に増大した。登山者の逐年の増加は大なる小屋の建築を必要とするに至り豊富となれる財力は設備の改善を促がすに至つた。かくの如くして一八八〇年代の終り頃より各支部は競つて登山小屋の新設及び設備に於て改善の先驅者たるべく努むるに至つた。爾來小屋の設計は益々好ましき外觀と單純にして勝手よき内部及び快適なる設備を形作る様苦心さるゝに至つた。

然し乍ら最近に至つて漸く我々は最後の認識に到達したのである。即ちこれ等高山の建築物に於ても藝術家の手腕を藉るに非ざれば到底最後の満足を得ざることはである。在來の小屋は多く建築に多少經驗ある支部の小屋管理者によりて建てられたるもの多く従つて單なる實用向きの建築として發達して來たのであつた。最近の小屋に於て我々は漸く藝術的の養ある建築家の協力により其の洗練された意匠に成る所の形により、小屋の内外に美を賦與し得てしかも其爲に何等特別の費用を要せざること及び建築的裝飾が登山小屋に向つても内外甚だよく調和するものなることを知るに至つた。又最近の小屋の計畫に於て其の前方に平坦なるテレースを設くるは訪問者の實際上の便宜に向つても又美的の當然の必要として建築と其周圍とを有機的に結合せしむる爲にも共に考慮を拂つた結果である。

一八六三年より一八八二年までの間に建てられた小屋は殆どすべて石積の外壁を持つものである。(Trockenmauerwerk)

一八八三年オーベルハスリの案内人により丸木小屋 (Blockbau) として建てられた最初のオーベラールヨホヒユツテが木造小屋として最初のもので、これ以來次第に此の方法が盛となり後には永い間専ら木造のみが行はるゝに至つた。尙其間に石造として建てられたものには一八八六年シユワルツエツクヒユツテ、ムーンテヒユツテ、フエライナヒユツテ、一八八八年第二のロートタールヒユツテ、一八九〇年ドームヒユツテ、一八九一年カラランダヒユツテ、シルヴレッツタヒユツテ、一八九二年エーラヒユツテ、一八九八年バルベルンヒユツテ、一八九九年チエルヅヒユツテ、一九〇〇年ガムヒバルムヒユツテ、一九〇一年新カラランダヒユツテがある。此年代の間に他の大多數のものは木造として建築されたのである。一九〇二年より一九一一年までのものは全部木造である。一九一二年建設のカムポテンチアヒユテ及び一九一三年レントタヒユ

ツテに於て再び石造が用ゐられ始めた。

一八六三年より一八八二年までの初期の小屋は多くモルタルを使用せざる石積の壁にて圍まれ、往々斜面を堀下けるか又は自然の岩を直接の背面として利用し、内面は石を露出したまゝか或は石壁に密接したる板張りの壁を用ゐたる爲め内面は濕氣を帯ぶることを免れず勢甚だ不評判であつた。建設者に取りては又木造の小屋を山麓の村にて完全に切込みをなし適當なる方法にて現場まで運搬し簡單なる基礎工事の上に出來るだけ短き工事期間を以て之を組立てる方法が特に便利に考へられたのである。かくの如き工事の實施と共に其の當然の結果として山地に於ける唯一の正統の木造建築なる丸木作りの方法が行はれずして、殆どすべての小屋は平地に普通なる木骨柱建の方法にて建てらるゝに至つたのである。かくの如き木造小屋の壁は内部は板張り (seifal) とし外面は羽目板の上を柱 (杵) *schinde* を以て被覆し、羽目板と外部被覆物との中間に建築用の厚紙又はアスファルト紙を張るのである。

此の方法により當時は暴風雨雪の侵蝕に抵抗する所の密なる壁面を作り得たと信ぜられたのであつた。

最近に至つて意見は再び變つて來た。石造の壁を有する新しき小屋の多數により此等の小屋は内面の板張と石壁との間隔を充分に保つことにより非常なる好結果を得ることが證明されたのである。又多くの木骨建ての小屋が高山の自然の威力に堪ゆる能はずして早くも腐朽せることの經驗が新しい認識に向つて大に役立つたのである。

將來に於ける S・A・C の小屋建設問題は新しきものゝ増設は寧ろ第二とし、既設のものを改築して時代の要求に適應せしむる點に存するであらう。又之と共に S・A・C は其義務として力をスキー宿泊所の設置と特別のスキー小屋の建設とに向つて注ぐことに努めねばならぬであらう。(未完)

## 一九三二年のオリムピック選手

### 撰抜について

廣 田 戸 七 郎

跳躍に跳躍を見せた最近の日本スキー界は、愈々此處に

一九三二年のオリムピック派遣選手を選定すべきシーズンを迎ふることになつた。多事なる我が國のスキー界は愈々多事になる一方である。一面よりすれば甚だ慶すべき次第である。

第一回オリムピック派遣當時と、今日の我が國スキー界とを比較するならば、數シーズンを出でずして實に驚異的な進歩を遂げて來て居る。

ジャムプ競技に於てレコードの示す四十八米五〇の最長不倒記録、五〇籽レースに於て（實距離は？としても）三時間四〇分二秒の記録と云ひ、共に本邦スキー界の進展の

目覺しさを伺ふに足る所である。

私は愈々オリムピック派遣選手を選定すべきシーズンに直面して、少しく選手撰抜について愚見を述べたいと思ふのである。

已に吾々はノルウェー選手の來朝によつて、二度オリムピックへ行つた以上の收穫を得た。この收穫と、そしてその價値を考へるならば今度のオリムピック行は第三回乃至數回目のオリムピック行と考へて希望を述べても良からうし、又さういふ覺悟で選手諸君が出掛けて欲しいと私は述べたいのである。そして選手を送らうとする人も此位の氣持を以て選手の爲にお膳立をしてやるべきであると考へる

そして今回の派遣は、第一回の派遣と自づと趣が異らねばならないことも考へねばならない。即ち第一回派遣は、見學第一ではあつたが、今回は競技が第一義で、見學は第二義に置かなければならないと云ふのである。私はスキー競技が何時までも、他の運動の尾に從つて行くことを欲しないのである。即ち私は常に雞口となるも牛後となるなと云ふ氣持でありたいのである。

私は已に前號に派遣選手に對する合宿論を簡單に述べてそして好きトレーナー招聘をも提唱したのである。

何處のスキー團體でも自分の團體から一人位は自費でも優秀と思はれる選手をオリムピックに送りたいからうし、亦數多くの優秀な選手を壯途につかせたい希望は聯盟本部で考へて居ることも申すまででないことであらう。然し經費が萬事解決する現狀であるから、其處に經費の許す範圍で選出法を講ずることになるのである。然らば選手選抜法を如何にすべきか。之は甚だ大問題である。

第一回の時は前年度の大會成績の順位で決定を見た。當時は日本のスキー界の事情が事情であつたから、あの方法に基づきより他に方法はなかつたのであらう。が、現今の

日本のスキー界の事情からして考へるならば、たゞ一回の全日本大會のみの成績順で決定することは、考慮すべき點が多々あるかと私は考へる。何故ならば、單にジャムブだけ考へても少くとも從來全日本スキー大會が開かれた様な地形のジャムピングヒルならば、相當に各地方に建設されて來て居るし、又より以上の競技用ヒルも出來て居るのである。即ち設備に於ては全日本大會と同等か乃至はより以上の設備の下に競技會の開催せられて居るものが少くも五指はあらう。

一方選手の技術と數はどうであるかと言へば、昔日の面影は已になくなつて居る。

斯様に極く一端ではあるが、昔日の狀態と現狀とは可成り異つて居るのである。そして此處に於て吾々は次回の選手派遣選抜につきお互に慎重に此問題を考慮すべきであると思ふのである。

未だ此問題については、誰も意見を發表して居ない様である。私は此處に私の提唱せんとする處を簡單に述べる。即ち次回オリムピック選手選抜方法に當つて、第一に今シーズンの全日本スキー選手權大會の成績を參考とするこ

とは勿論、豫め全日本スキー聯盟に於て公認すべき地方大會を提示し、而して夫等の大會に於ける成績をも參考資料とすること。更に既住の成績も併せ考慮すること。而して三月の春のシーズンまでに、派遣選手候補者を決定し、事情の許す限り適當の地に於て、一名の外國トレーナーを附し（若し費用許さざる時は國內より選ぶ）合宿練習を爲さしめ、其候補者中より最後の決定選手をあげることに、その決定方法は選抜委員並びにトレーナーの合議によつて決定すること。

之は理想的選抜法にして、言ふべく實行困難なりといふ人もあらうけれど、事情の許す限り最も公平な選抜法をとることと、一行の團結を固く築いて置くといふことからしても必要であると思ふ。若し今回之が實現不可能であるならば、宜しく次回には是非此方針をとる様に全日本の各團體が合議されて然るべきと思ふのである。

此方法に關する費用の問題は、私は別に考へて居ない譯でも全然ない。といふのは、合宿も宜しいが、その費用を何處から出すか。

元來此費用は聯盟に餘裕があれば、無論聯盟から支出さ

るべき性質であると思ふが、目下の聯盟では、或は難事であるかも知れない。そこで吾々はお互に考へたいと思ふ譯である。

一体少くともオリムピック派遣候補になるといふことは已に選手自身の名譽でもあり同時に、その所屬團體の誇りである。更に又學校團體などであれば、三月の春休などは自費でも皆合宿をやつて居る位である。

それれれ綜合して私の合宿費用は、選手自身支辨するかそれとも各所屬團體で負擔して出しても宜しいと思ふ。否選手の爲に所屬團體が之位の負擔をしてやることは、日本スキー界といふ大有機体の爲に盡すと思へば、問題にならない程小さいことで、而も効果の大なる事柄である。

かく考へ来れば、合宿費用などは大問題のことでもないことになる。

更にもう一つ弱い人達に考へられ勝つことは、合宿の候補者中より最後の選手決定問題であらうが、これは問題にする方が間違つて居ると思ふ。

何故といふに、若し此最後の決定を見て、不平、不満を唱へる人が出たとするならば、その不平、不満の人達こそ

自己欺瞞をして居るものではあるまいか。

何となれば自分達が組織して居る聯盟から、自分達から承認を與へて決定したであらう選抜委員なり、トレーナーに對して不信任を唱へることであるから。

若しも此處に顧みることなく、選手選抜の云々を恐れてつまり人情とか、義理とかを問題にして妥協的に人選が行はるゝ様なら、日本のスキー界は暗に進む様なものであるまいか。大抵出る不平は自分達に所屬して居る選手が選から洩れた様な場合に決つて居る。そういう不平を唱へる團體があつたら、何故選抜に洩れる様な、否派遣候補に上る様な優秀な選手を養成すべく、スキー奨励をして居るのかと、むしろ私はスキー奨励の意義と同時に、競技といふものゝ本質を考へて下さいと云ふであらう。

斯く述ぶる程、私は選抜選手決定に對しあけらるゝ選抜委員を信頼し、その決定機關に絶對の價値を持たせたいと考へるのである。それだけ選抜委員なり聯盟委員は、責任を感じて下さると私は信するのである。

以上の如く考へて來ると、私の提唱する合宿論も、選手決定法も必ずしも今期實現不可能でもない様に考へられる

むしろ譯なく出來さうである。

私はシーズンの初めに當つて此持論を發表し、多くの御賛成を得て、是非今シーズン此實現を期し、以て一九三二年のオリムピックに優秀なる成績を期したいと思ふのである。

## スキー保存法一考

高橋 昂

うらゝかな春の日ざしに溶け行く雪に無限の離別をおしむ若人の群は奥地の山へくと旅を進める。高根の心よき粉雪も午後の日の輝きとゞもにいつかはザラメ雪の滑走を餘儀なくせられて、不潔極まるタールや芥の異臭を肩に都の人となる。

庭先に無雑作に投出された、スキーは、それからの幾日かを主の無情をかこちつゝ、夏眠を続ける。

心ある主は、一冬の勞をねぎらふ可く異臭のwaxを拭ひ取りて適當な保存をして休ませてくれる、ハンネスシユナイダー氏は或る山小屋での一夜に次の様なことを傳へてくれた。

「スキーは常に使用後は清潔に、waxは必ず落さなけ

ればならぬ、その方法は、廢物になつた安全剃刀の刃を用ひるか揮發油を用ひる。その後アマニ油に石油三%を加へたものを引き保存木をかけて冷所に置く」

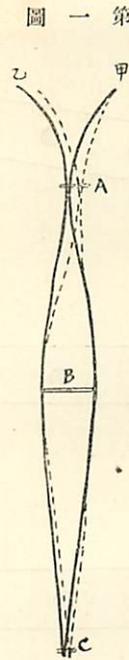
心なきスキーも此の温情なくしては如何な名品もその生命を失ふ。

このことはスキーを履く誰れもが知つて居ることながら仲々實行されがたいものである。

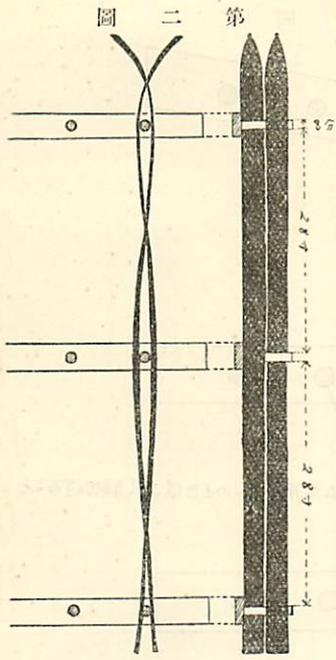
保存に手輕なものに保存木と稱するものが仲々澤山あるけれどもそれはスキーにとつて命取りの主となることをゆめ／＼忘れてはいけない。

優秀なスキーは左右の條件が等しかるべきが理想であるされどこれは理想であつて木質の強さ、彈力等の違ふこと

が普通なのである、この各々異なる甲乙二個を左圖の如く A・B・C の三ヶ處で締めつけたならば、必ずや甲乙二個の對稱は破れ時によつては全く使用し得ない様になるのである。



例へば甲が乙より強いとしたならば乙は次第に甲に引き寄せられて點線の如くになり遂に廢物となる。(第一圖)



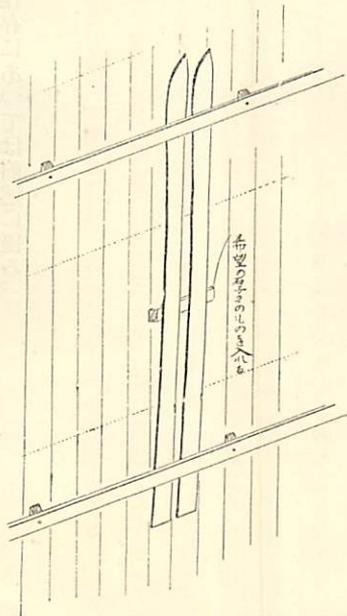
私はこれによるいくつかの廢物を作り散々弱りきつた結果最近第二圖の様な保存木を考へて間口三尺奥行七寸と云

ふ様な僅少な處に取付けて七臺と云ふ驚くべき多數のスキーを整然と保存して居るが非常によい成績を示して居る。特色を例擧すれば

1. 希望する如何なるカーブをも作り得ること
2. 整頓及場所の經濟なること

私は此の方法を用ひて擦れ又は尾上り其他の狂ひを生じ

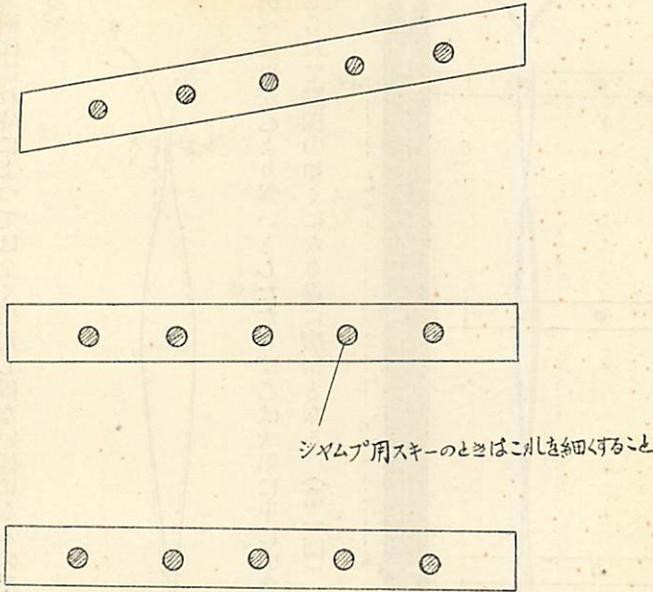
第三圖



て廢物となつたスキーを直して立派に生かした幾多の實例をもつて居る。

又此の場所の經濟及整頓と云ふことに至つては在來の方法等は比較するさへ愚な位である。殊に多數のスキーを持つて居る學校等にあつてはこの方法を採用するならば一

第 四 圖

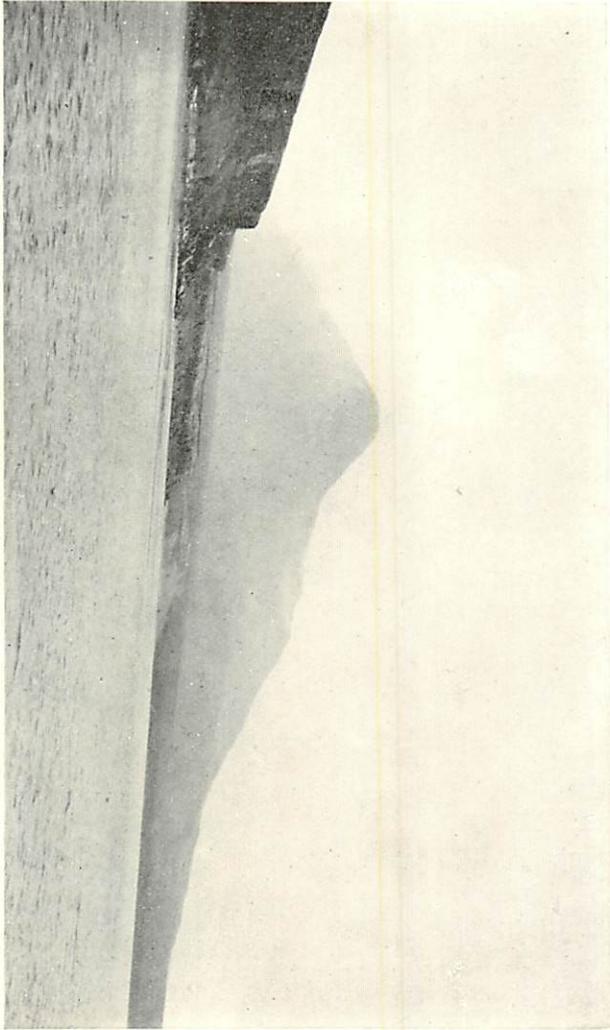


様になる。これはスキーの長さが大体似たりよつたりの時であるが長短の差が甚だしいときには第三圖の様な取付を

目にして臺數正否、希望スキーの引出等をたちどころに得られて蜘蛛の巣を拂ひながら尋ね廻る様なこともなく済む

なすことも一法である。

場所の關係上極めて狭い場所即二階への梯子段の側壁とか三尺の通路の側壁の様な奥行の使用をより以上に制限せられた處に利用するときには第四圖の如き構造にても前述と同一の目的を得られるばかりでなく特にジャムプスキーの保存にあつては前述に優る。



千島温翻古丹島根茂山

徳永芳雄

# 遠景

井 田 清

In allen Tiefen musst du dich prüfen,  
zu deinen Zielen dich klar zu fühlen. — Dehmel —

底の底でお前はお前をためして見ろ

お前の目標に瞭りと接近するためだ。

ま へ が き

山—不斷の逃げ去り易い無關心な心の風景、あの無盡藏な心の遊戯—その山が自分を慰めて居るのか一人の傍觀者にすぎぬ自分を。

追憶の憂鬱は平凡で幼稚なものだと言ふか—眼前に擴けられた風景を想へ。

自分を圍繞し自分を壓する壯嚴な山の憂鬱は天空をかける追憶の翼に外ならぬ—スクスクと山の靈氣をたゞき永遠

の空をかけ去る一沫の心—その空虚な寂寞とした心をつらぬいて無に對する意識が閃めく。

「我」が「無」に置き代へられた心の安らかさがやがて追憶の憂鬱を輝しいものにして呉れる。

山嶺に憩ふ一人の放浪者の追憶の心は慄然とするやうな眩暈するやうな搔き消し難い深淵の靜滲さである。

そうして自分にとつて山を理解するといふ事は生命生活の根本的統一を意識することに外ならぬ。生命と發展の兩點から全的に生活を認識することである。

今自分の心には追憶の山脈が重疊として波打つて居る。自分は遠景といふ心の舞臺で信仰といふ朦朧とした追憶にふけらうと思ふ。

山といふ個我が意識生活に先立つて夢遊病的に暮して居た追憶と歡喜の衷の山について。

ふと思つた。

重たい黒い影のはちきれさうな孕腹の裡に山の淡い光をとどめて居る自分の心を。世間といふ感情でもみくちやにされた山、生活から遠くかけ離れた所で山に物語る親しさ遠い山脈に背のびしたくなる心で一杯な自分、そんな様な事をふと思つたのだ。

此處は兵營風景で一杯だ溢れさうだ。

突然Aが魂を山に残して死んで終つた。古い思ひ出し笑ひの様にBからCからDから山の便が來た。Eは如何に自分の新家庭の温床に山が培はれつつあるかを書いて寄したFは俺の生活にもう一人の人間が這入つて來ると書いて來た。

自分は「外出して今日皆んなの寫眞づらを懐しく見た」と書いてやつた。そして丁度幼子達が父母に伽嘶をせがむ様な執拗さで自分は心に遠い山の追憶を尋ねて見た。

怠惰な鈍感な兵士である自分は木蔭がやたらに好きにな

つた。

其處ではかすかな梢の風の聲に峰を切る山風や吹雪や牧場の丘の快い微風それから村から村へふら／＼歩く時の明るい豊かな歌聲の様なその風を想ふ事が出来る。

若しもその木蔭の叢に小石でも見付けると岩の芳しい香や優しい陽のぬくもりや落石のほがらかな響を想ふ。

ふと山の厚い肩にすがつて見たくなる。

懐しい徑、岩角、頂、丘、牧場、山小屋そんなものを心の衷ですつとたどつて行く。たどり疲れてふと見ると美しい雲の切間が腫にうつつた。

其處には像のない自分の心がいつも隈どられて居る。底なしの青い深さであつたり、刀の様な青い銳利さであつたりするのだ。或は見當らぬ自分の心の休み場であつたりする。

夢に満ちた樞があり幸福にあふれた苦惱があり悒鬱な喜悅があり笑ひも涙も悲しみも陽に彩色されて日々の姿を啓せてくれる。

雲の切間にはありとあらゆる山の感情がとけて居る。

山は心だ。

遠い所で可愛い口元をした雲の切間がさう言ふのだつた  
愛らしい、山の草花ならぬ練兵場の泥まみれな草もさうい  
ふのだ。

山は確に心であるにちがひないと自分も思ひ耽つた。

あの空の雲の切間を通して見えるのが自分の心の相であ  
り山だと言つたら又「山の奴等」は面白がるだらうと思ひ  
乍らも、

底の底にふれて見ろ

しつかりその目標にふれて見ろ

山は心であるにちがひないからだ

遠くから山にしつかりふれて見ろ自分の生活の奥から心  
の奥から山にしつかりふれて見ろ、と心に繰り返へしつづ  
やいた。

ふりかへると此處は兵隊屋敷だ、長々と厩の屋根が重り  
合つて居る。

ふと死んで終つたAにたよりしたアンデルセンの言葉を  
思ひ出した。

In den ersten Tagen, nachdem ich in die Stadt gekommen  
war es mir eng und einsam; statt des Waldes und der grünen  
Hügel hatte ich nur die grauen Schornstein als Horizont.

Nicht einen einzigen Freund heßss ich hier, und kein bekanntes  
Gesicht grüßte mich. — Ich sah ein Gesicht, —

自分は心の裏で一つの顔を想ひ續けて居る。それは遠い

山の顔だ。不思議と死んだAに似よつた顔を。

山は心であるにちがひないとさう思ひ乍らその日軍隊日  
記の片隅にこんな詩を書いて置いた。

A 君に

Gib mir die Hand.

Der weisse gebirge stehen so still,

Ich will dir sagen,

Was die Stille rings verschweigen will

Gib mir dir Hand

Gib mir in deiner Hand dein Herz.

それから此度外出したら是非Prelude in D Flat (Chopin.  
Op. 28, No. 15)を聞かなければならないと思つた。雨だ  
れの様な遠い山のつぶやきをAも好きだつたから。

何もかも遠い景色だ。山は心であるにちがひない一番身  
近かな心であるにちがひない。カツラギの襦袢、袴下が心  
地よく皮膚にふれて居る—素朴な濃やかな白い陽の香—遠  
い景色の奥からサラサラと流れて来る小川の様な香氣。  
遠くて近い山の心を想ふ。

(一九三〇・九・一九・兵營にて)

札幌に於て開催せられた距離競争の  
感想及び順位一束 (下)

高

橋

昂

全道中等學校

18km. デイスタンスレース記録表

昭和5年2月9日

順位	所屬	姓名	出發時刻	到着時刻	所要時間	パンケイ峠	伏見稻荷	札幌神社南島居
1	樽商	關戸力	9°13'30"	10°39'20"	1°25'50"	9°36'0"	10°15'25"	10°31'40"
2	北中	北山正潔	9°25'0"	10°54'13"	1°29'13"	9°48'10"	10°28'39"	10°46'15"
3	樽商	ニツ山勝一	9°27'0"	10°57'50"	1°30'50"	9°50'30"	10°32'46"	10°51'50"
4	樽中	中島洵	9°21'30"	10°53'54"	1°32'24"	9°44'50"	10°27'32"	10°46'18"
5	一中	山田四郎	9°17'0"	10°49'53"	1°32'53"	9°40'25"	10°22'8"	10°41'20"
6	札商	後藤民彌	9°29'30"	11°2'42"	1°33'12"	9°52'10"	10°34'5"	10°56'20"
7	樽商	大浦忠治	9°3'30"	10°36'43"	1°33'13"	9°27'0"	10°10'45"	10°28'40"
8	一中	佐藤啓介	9°8'0"	10°41'57"	1°33'57"	9°30'40"	10°14'40"	10°32'12"
9	樽中	油谷圭二郎	9°12'30"	10°47'28"	1°34'58"	9°36'25"	10°22'5"	10°40'5"
10	〃	木村顯藏	9°15'0"	10°50'18"	1°35'18"	9°38'0"	10°21'58"	10°43'10"
11	北中	棚橋卓郎	9°26'0"	11°2'5"	1°36'5"	9°48'50"	10°35'36"	10°54'50"
12	札商	藤野勳	9°26'30"	11°2'40"	1°36'10"	9°50'30"	10°35'29"	10°55'30"
13	札師	鈴木慶三郎	9°6'0"	10°42'20"	1°36'20"	9°29'50"	10°13'55"	10°32'30"
14	札商	川口嘉之進	9°16'0"	10°52'40"	1°36'40"	9°39'30"	12°24'0"	10°45'20"
15	北商	坪川武重	9°14'0"	10°51'50"	1°37'50"	9°38'40"	10°25'0"	10°45'0"
16	〃	吉田勉	9°18'0"	10°55'52"	1°38'22"	9°42'15"	10°27'9"	10°47'10"
17	樽商	小池高行	9°30'0"	11°8'43"	1°38'43"	9°54'30"	10°40'12"	11°1'5"
18	二中	伊藤雅男	9°2'30"	10°43'23"	1°40'53"	9°27'20"	10°14'20"	10°34'45"
19	札師	三上勝雄	9°4'30"	10°45'30"	1°41'0"	9°30'20"	10°17'16"	10°36'30"
20	〃	小林進	9°24'30"	11°7'6"	1°42'36"	9°49'30"	10°39'6"	10°59'35"
21	札工	八木孝夫	9°14'30"	10°57'24"	1°42'54"	9°40'10"	10°28'12"	10°50'20"
22	二中	田口不二男	9°16'30"	11°1'57"	1°45'27"	9°41'25"	10°33'41"	10°55'5"
23	北中	山口正一	9°4'0"	10°49'49"	1°45'49"	9°28'30"	10°14'0"	10°35'4"
24	一中	安孫子正	9°5'0"	10°51'0"	1°46'0"	9°30'0"	10°18'29"	10°42'50"
25	北中	毛内正	9°11'30"	10°50'9"	1°47'39"	9°35'30"	10°21'0"	10°41'50"

26	檢商	本間善治	9°11' 0"	10°59'11"	1°48'11"	9°37'10"	10°29'35"	10°51' 5"
27	札師	松本信通	9° 3' 0"	10°52'21"	1°49'21"	9°30' 0"	10°22'49"	不明
28	旭中	田利吉次郎	9° 1' 0"	10°52'13"	1°51'13"	9°27'50"	10°20'44"	10°43'30"
29	札工	相馬吉一	9° 0'30"	10°58'49"	1°58'19"	9°28' 0"	10°25' 5"	10°50' 0"
30	二中	山口孝	9°21' 0"	11°22'35"	2° 1'35"	9°46'35"	10°42'50"	11°10'10"
31	鐵教	佐々木照雄	9°29' 0"	11°43' 5"	2°14' 5"	9°56'25"	10°57'39"	不明
出場者 55名 途中棄権者 24名								

雪質 良 天候 快晴  
 状況 最良

全道中等學校

32km. リレーレース記録表 昭和5年2月9日(午後1時30分出發)

順位	屬	姓名	個人所要時	所要時	順位	屬	姓名	個人所要時	所要時
1	檢中組	花田傳三郎	47'31"	3° 7'50"	5	一中組	佐藤啓介	51'19"	3°16'45"
		木越定彦	46'52"				佐藤昇	48'42"	
		木村顯藏	45'17"				山田四郎	50'48"	
		油谷圭二郎	48'10"				林俊雄	45'56"	
2	北商組	澁谷虎三	49'14"	3° 8'41"	6	旭師組	高野榮作	56' 0"	3°22'53"
		坪川武重	47'23"				平塚義雄	51' 9"	
		吉田勉	45'51"				今野良雄	49'23"	
		荒關勉	46'19"				森透	46'21"	
3	檢商組	ニツ山勝一	49'42"	3° 9' 2"	7	旭中組	村上昇	51' 2"	3°24'10"
		關戸力	48'17"				但野寛	51'39"	
		小池高行	46'52"				竹内研三	50'25"	
		大浦忠治	44'11"				田利吉次郎	51' 4"	
4	札商組	小野寺正	48' 3"	3°10'46"	8	札師組	鈴木慶三郎	51'29"	3°26'37"
		藤野勳	49'38"				小林進	52'42"	
		後藤民彌	44'53"				三上勝雄	49' 6"	
		川口嘉之進	48'12"				武内春雄	53'20"	

天候 曇 雪質 濕  
 状況 良

第七回北海道選手権大會記録

50km デイスタンスレース記録表

昭和5年2月25日

順位	姓 名	所 屬	所要時間	順位	姓 名	所 屬	所要時間
1	中村新一郎	北 大	4'26'39"	9	後藤正雄	明 大	4'55'28"
2	木越定彦	樟 中	4'36'23"	10	佐藤啓介	一 中	5'00'38"
3	花田傳三郎	"	4'38'24"	11	鮎澤熊一	三菱美唄	5' 2'16"
4	緒方七郎	明 大	4'43'54"	12	小池高行	樟 商	5' 7' 3"
5	北山正潔	北 中	4'46' 8"	13	後藤民彌	札 商	5' 9'35"
6	安孫子六郎	北 大	4'51'33"	14	池田稔	樟 中	5'12' 0"
7	鎌田寅男	三菱美唄	4'53' 1"	15	山口正一	北 中	5'23'38"
8	葛西儀四郎	札 鐵	4'53'38"	16	中川寅之助	札 商	6' 7'35"
出場者 28名				途中棄権者12名			

天 候 晴 氣 温 -6° (9.00am)  
 雪 質 良 状 況 良

北海道選手権大會

18km デイスタンスレース記録表

(フク)……單複ヲ兼ネタルモノ  
 (複)……複合ノミノモノ  
 昭和5年1月25日

順位	所 屬	姓 名	所要時間	備 考	順位	所 屬	姓 名	所要時間	備 考
1	樟 中	木村顯三	1'27'47"		9	北 商	吉田 勉	1'32'51"	
2	一 中	山田四郎	1'28'29"	(フク)	10	樟 商	關 戸 力	1'33'04"	
3	小樟 三菱	本間四郎	1'28'40"		11	北 商	坪川武重	1'33'28"	
4	明 大	横山平一郎	1'29'08"		12	樟 商	大浦忠吉	1'33'31"	
5	樟 中	油谷圭二郎	1'29'37"	(フク)	13	北大 OB	長田光男	1'33'38"	(フク)
6	北 商	澁谷虎造	1'31'06"		14	北 大	弓納持允雄	1'33'40"	
	北 大	黒田 敦	1'31'17"	(複)	15	札 師	鈴木圭三郎	1'34'07"	
7	三菱 美唄	高橋與市	1'31'57"		16	三菱 美唄	駒井三郎	1'34'08"	
8	北 鐵	安立正雄	1'32'20"		17	樟 中	中島 洵	1'34'56"	

18	一中	佐藤昇	1°35'15"		34	札商	小林周一	1°43'36"	
19	三菱美唄	鹽田鐵雄	1°35'36"			樽商	四ツ谷勇	1°43'49"	(複)
20	北中	棚橋卓郎	1°36'21"		35	一中	近藤守	1°44'07"	
21	札商	藤野勳	1°36'23"		36	北罐	渡邊武司	1°44'13"	
	明大	安達吉治	1°36'34"	(複)		三菱美唄	椎野軍紀	1°44'15"	
22	札商	川口喜之進	1°36'46"		37	北罐	久慈勉雄	1°44'40"	(フク)
23	一中	林俊夫	1°36'55"			北商	中垣勤三	1°45'9"	
24	兄弟	佐々木金彌	1°37'09"			北大	吉田初雄	1°45'9"	
25	北大	中山二郎	1°37'17"		38	樽商	大原吉馬	1°45'57"	
26	北大OB	秋野武夫	1°37'58"	(フク)	39	北大OB	村本金彌	1°48'8"	(フク)
	北大	武野毅次郎	1°38'44"	(複)		二中	新妻正一	1°48'9"	(複)
	北中	濱謙二	1°39'18"	(#)	40	札工	佐藤亘	1°48'44"	
	"	河原武夫	1°39'20"	(#)	41	二中	伊藤雄男	1°49'01"	
27	"	毛内正	1°40'3"		42	樽商	本間善治	1°49'05"	
28	札師	石塚正夫	1°40'15"			"	若月利治	1°53'53"	(複)
29	北大OB	杉村鳳次郎	1°40'20"	(フク)		樽中	伊黒乙治	1°56'26"	(#)
30	一中	相良成一	1°40'37"			北罐	飯田三郎	1°57'25"	(#)
31	三菱美唄	齋藤武次	1°40'38"		43	樽水	河崎正一	1°58'30"	
	樽水	平川豊	1°41'15"	(複)	44	札鐵	駒木根會記	2°13'2"	
	北商	田中清次郎	1°41'58"	(#)	45	札師	松本信道	2°18'42"	
32	札商	小野寺正	1°42'53"		46	函商	山崎光次郎	2°19'5"	
33	明大	伊藤健藏	1°43'14"						

出場者 62名

途中棄権者 12名

雪質 良 天候 快晴

状況 最良

雜 錄

◆「スキー」に關する五色温  
泉宗川旅館の記録より拔萃

本會顧問黒井悋次郎氏から送つて頂いた、五色温泉宗川旅館の記録の中から「スキー」に關する事項を左に掲ぐ。

一、明治四十四年三月奥國人クラツツアー氏外横濱在留の商館獨逸人男女三名同行して来る。東北地方青森迄の各地、スキー練習場としての適地を見出さんため探檢旅行の由にて當五色に來れるなり。當地を除いては雪量、雪質の適良なる場所なしとの談なり。

一、同年十二月二十五日第二回目前記クラツツアー氏及同國人ウインクラー氏並に獨逸人ブラーグ氏の三人來遊正月に至らば團體にて來宿の件を協議し、廿八日歸濱。越へて四十五年正月二日一行十二名にて來遊、それより毎年廿名以上の團體にて來り「スキー」練習をなし大正元年十二月には「アルペンスキー」俱樂部なるものを組織

し大正三年一月には大舉六十餘名の大團體にて來遊す。然るに歐洲大戰始まりたる結果同年十二月には「アルペンスキー」俱樂部も解散することとなり、獨逸人の來遊するもの其跡を絶ちたり。

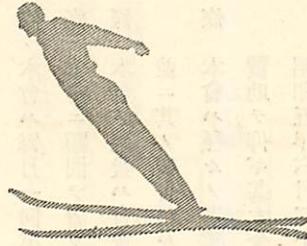
一、大正三年一月には學生團體の最先登者として學習院生徒板倉、坊城、南、岩倉、戸田の諸氏及外一名初めて來遊。

一、大正四年一月末には山形の歩兵第卅二聯隊の選拔員スキー練習會あり。

一、大正五年仙臺スキー同好會組織せられ同時に當五色に遊び練習をなす。

一、大正十一年六華俱樂部組織せられ、同十三年の春より俱樂部の建築に着手し、同年十二月竣工。秩父宮殿下の御成を辱ふして開館す創立時に於ける發起者は左記の十名にして

- |   |    |    |    |    |     |
|---|----|----|----|----|-----|
| 侯 | 細川 | 護立 | 伯  | 坊城 | 俊良  |
|   | 渡邊 | 八郎 | 子  | 相馬 | 孟胤  |
|   | 子  | 土屋 | 正直 | 黒井 | 悋次郎 |
|   | 伯  | 黒木 | 三次 | 伯  | 前田  |
|   |    |    |    | 利男 |     |



# スキージャンピング

廣田戸七郎著

山とスキーの會刊行

本書はスキー競技に於て最も重要なスキージャンプの一切を解説し、且つ國際スキー競技會に於けるジャンプ競技の状況を詳説してあります。

四六判

二百四十四頁  
別刷寫眞版三十二葉  
挿入圖版四十餘圖

定價 金壹圓五拾錢  
送料 拾貳錢

御希望の方は振替口座小樽八四九五番札幌市  
北二條西十三丁目一番地「山と雪の會」宛に  
御申込と同時に御振込下さい。

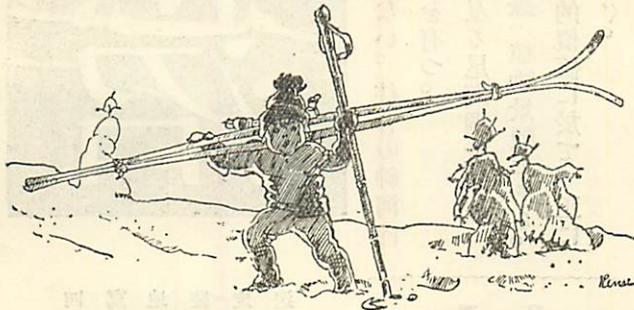
大  
編  
目

アメリカ直輸入

# ヒツコリースキー材

シュブルングスキー  
ラングラウフスキー  
一般用スキー

# Haga Ski



スキー附屬品

## 芳賀スキー商店

札幌市圓山四丁目  
北海道

東京市丸の内  
区丸の内四丁目

札幌市丸の内  
区丸の内四丁目

京大講師  
理學博士

# 武田久吉著 (最新刊)



敬虔なる山岳宗徒の清杖は既に上高地には印されない。往昔の神河内を懐しむ吾岳友諸兄は安息所として唯一の神境尾瀨を有つ。

本書は高山植物學界の至寶武田博士が過去數次に亙る尾瀨調査旅行の所産にして、紀行文集なると共に貴重なる學術的記録、植物景觀である。卷末に附綴せる百葉の寫眞は其鮮麗さに於て、其學的價値に於て、正に世の驚異であらねばならぬ。敢へて諸彦の清鑑を仰ぐ。

四六判・三七〇頁  
寫眞一〇〇枚  
地圖(大)一枚  
裝幀 清雅  
定價 三圓  
送料 二十七錢

### 目 要

尾瀨と鬼怒沼  
初めて尾瀨を訪ふ  
尾瀨再探記  
尾瀨をめぐりて  
春の尾瀨  
秋の尾瀨

辻村伊助著 スウイス日記  
辻村伊助著 ハイランド

送四・五〇  
送二・二七  
送三・〇〇  
送二・二七

加納一郎著 氷  
日本山岳會編 山

と  
雪  
日記

送二・〇〇  
送一・八〇  
送一・三〇  
送〇・六〇

振替東京七六八四四番  
電話神田二七七七番

## 梓書房

東京市神田區  
北甲賀町四

高級スキークラックス  
オリエント

スキーの王國

（以下は透かし印刷の文字）

發 賣 元

飯 田 商 會

札幌市南一条東二丁目

スキーの王國

ノルウエーのオストバイに劣らぬ

太陽印  
スキーロー

- メデアム
- ミツクス
- クリスタル

十一月下旬より發賣

札幌市北二條西十三丁目一番地

發賣元

雪山莊

◆「スキー」を研究せられる人、登山に興味を  
持たれる方が一人でも多くお読み下さること  
をお願いいたします。

◆「山岳」と「スキー」に関する御寄稿と寫眞  
の御惠送をお願いします。

原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一  
字下けること。

定 價 金 參 拾 錢

\*前金御申込か、現金でなければお送りいた  
しません。

\*御送金はなるべく振替にてお願致します。

\*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

\*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包  
裝に同封します。

\*次の御送金あるまで配本を見合せます。

昭和五年十月二十七日印刷  
昭和五年十一月一日發行 (毎月一回一日發行)

編輯者 長 野 寛

印刷兼 發行者 長 野 寛

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十三丁目

發行所 山と雪の會

振替口座水樽八四九五番

昭和五年十月二十七日  
昭和五年十一月一日

印刷納本  
發行

(毎月一回一日發行)

山と雪

第貳號

定價金三十錢

美滿津の冬山の道具!!

登録商標

『アールベルグ・スキー』新發賣

アメリカン・ヒツコリー及いたや其他各種

署名入

“HANNES SCHNEIDER”



(型録進呈)

合名會社

美滿津商店

東京本郷赤門前